

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：34513

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2014～2017

課題番号：26300002

研究課題名(和文)幕末から明治維新时期の日仏両国関係からみた男子服意匠の経緯と実態

研究課題名(英文) Historical Circumstances of the Men's Clothing Design from the Viewpoint of Japanese-French Relations from the End of Edo Period to the Meiji Restoration

研究代表者

徳山 孝子 (TOKUYAMA, Takako)

神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・教授

研究者番号：10271470

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,500,000円

研究成果の概要(和文)：礼服・軍服などの男子服意匠の導入に関わる幕末から明治維新时期にかけての日仏間の交流の経緯と実態の一端を明らかにした。

明治天皇の御正服の意匠とAICP校に現存する絵型の比較検証から、礼服などの男子服意匠の導入がフランス支援による事が判った。訪仏した日本人との交流が深かった洋裁店「オウギャラリードパリ(S・ブーシェ)」は、男子服の発祥経路の一つとして指摘できた。ナポレオン3世から徳川慶喜に贈呈された軍服、軍帽等の軍装品に関して、仏軍が定める詳細な仕様書などの資料が得られた。The Tailor's guideの技法は『西洋縫裁(裁縫)教授書』を介して伝えられたことが判った。

研究成果の概要(英文)：We clarified some parts of the history and actual situation of interaction between Japan and France from the end of the Edo period to the Meiji Restoration, which greatly influenced the introduction of male clothes designs such as formal dresses and military uniforms.

We found that the introduction of male clothes designs such as formal dresses and military uniforms began with French support by comparing the design of the dresse of Emperor Meiji with the pictures existing at the AICP school. The tailor "Aux Galeries de Paris (S. Boucher)" where deeply interacting with Japanese who visited France was pointed out as one of the beginning place of male clothes. About the military clothes such as military uniforms and military hats, presented by Napoleon III to Yoshinobu Tokugawa, detailed specifications by the French Army were obtained. The techniques of The Tailor's Guide were conveyed through "A Teacher's Guide to Western Sewing".

研究分野：服飾史

キーワード：洋装化 男子服 明治天皇 徳川慶喜 パリ万国博覧会 洋裁店エス・ブーシェ 技法書 軍服

1. 研究開始当初の背景

明治維新期は封建社会から近代社会へと急激な変化を遂げた時期であり、我が国の歴史上の転換期でも最も重要な時代である。そのため、国際関係はもとより、政治・経済・社会をはじめとする多様な分野で厚い学術研究の蓄積が見られる。ところが、「洋装化」自体の研究は他分野に比べればその歴史的重要性はほとんど顧みられなかった。また、明治期の服飾史研究では礼服・軍服・制服などの意匠の変遷や、それらの服制の歴史などの先行研究にいくつかの成果が存在するものの、「洋装化」の進展に不可欠な役割を果たした諸外国からの支援・交流の実態に着目する研究はほとんど見られないのである。

2. 研究の目的

1830年創立の歴史と伝統をもつパリの服飾技術専門学校、AICP校*校長J・P・ヴォークレー氏より、日本由来の注文書や絵型などの同校の資料の存在を知らされたことをきっかけとしている。それらの資料は明治期の男子服の「洋装化」がフランスからの支援で始まったことを裏付ける貴重な証拠である。

そこで、我が国の洋装文化形成の最初期において、礼服・軍服などの男子服意匠の導入に大きな影響を与えた幕末から明治維新期にかけての日仏間の交流の経緯と実態を明らかにすることを目的とした。

*Académie Internationale de Coupe de Paris

3. 研究の方法

本研究では、順次拡張していく同時期の「洋装化」の対象を限定するため、特に男子服意匠におけるその具体的・象徴的事例として、4項目を抽出した。

- (1) 国民に新時代を印象づけた明治天皇の御服(軍服)は、AICP校に関連する意匠の絵型が現存する。
- (2) 洋裁店「エス・ブーシェ」が店の商用名刺に民部大輔御用達という称号を記載した記録が現存する。
- (3) 写真が現存する徳川慶喜の洋装姿は、ナポレオン3世から贈呈されたものとされる。
- (4) 明治前期の男子服技法書には、*The Tailor's guide* からの技法導入が大きく関与していると仮定する。

これらを採り上げ、その歴史的経緯とそこに関わった日仏関係者の具体的動向および、その意匠や制作技術の導入の実態に関して、文献、服飾関係および外交文書の一次資料の調査収集とその分析を実施した。

4. 研究成果

- (1) 明治天皇の御服(軍服)とAICP校に現存する絵型の検証

国民の新時代を印象づけた明治天皇の御

正服(軍服)を取り上げ、その歴史的経緯と意匠を調査収集とその分析により明らかにした。皇室では束帯装着は朝儀のみを除いて廃止され、西洋からの礼服導入が始まった。明治天皇の肖像画でその足跡をたどることができる。明治神宮所蔵の御正服(御上衣・御袴)、御肩章、御正帽は、明治6年6月3日、欧州各国皇帝の服制を斟酌して制定された軍服の正服である。御上衣は黒羅紗金線二条および菊唐草縁取、裏地固地綾白色小葵文。助骨五段(金モール二条)、釦は菊花文様十五個、ホックは六箇所ある(内襟ホック一箇所を含む)。御袴(ズボン)は白羅紗金モール菊唐草模様例章付、裏は固地綾地紅色繁菱模様。御肩章は、金モール菊花章および唐草模様、菊花章金鍍金釦、金モール房四十条が施され、御正帽は黒天鷲絨(ビロード)張、白色羽毛付、上部に金モールと菊唐草模様が施され、側面には金モール三条と純金菊花章釦、空色と白色のボタンが付されている^①。

明治天皇の軍服は、AICP校に所蔵されている軍服の絵型と酷似している。その絵型には、DOLMAN(ドルマン)・DE L'EMPEREUR DU JAPON(日本国帝国の軍服上着)・OR SUR DRAP NOIR(黒ラシャ地に金色)と記されている。ドルマンは「軽騎兵(Hussars)」の軍服であった^②。軍服の特徴は肋骨服である。絵型は、首から後ろ肩にかけて菊と唐草文様、前身頃から腰回りも全部菊と唐草文様で縁取り、両脇にスリット、助骨五段(モール二条)に菊花文様の5つボタンであった。軍事博物館学芸員のJulien Voinot氏は「明治天皇の軍服のデザインは、騎馬隊の毛皮付き軍服と似ていたが、日本風にアレンジされていた。また、その原形は15世紀、ハンガリーの軽騎兵のデザインと考えられる」と説明した。絵型は、明治天皇の肖像画の軍服と相似するが、肩章がつけられ、絵型よりも菊と唐草文様が多く使われる。縁取りの模様も異なっていた。軍服を仕立てる折には、絵型を基にしてさらに明治天皇に相応しくデザインしたと考えられる。今後は、フランスに発注した絵型は、日本陸軍に軽騎兵という兵科はないため、両国関係者による交流の具体的経緯と男子服意匠の導入経過を明らかにする必要がある。(代表:徳山孝子)

- (2) フランスにおける洋裁店「エス・ブーシェ」の位置づけと日本人との交流

パリの洋裁店「エス・ブーシェ」のあゆみを明らかにするとともにエス・ブーシェ会社と日本人との交流を歴史的に位置づけた。

1862年11月13日(木)に「デバ」^③誌は、ギャルリー・ド・パリの開店というタイトルで記事を掲載したが、住所はイタリアン通り29番地で、ミコディエール通りとイタリアン大通りの角に位置する広々とした店である。さらに、新しい店に工事が必要であったため、11月18日に延期することも記されている。1862年11月18日発行の「タン」^④誌には、

大きく開店広告が掲載され、同発行の「デバ」^⑤誌にも、クレミュー・ブーシェ会社 (Crémieux Bouché & Cie) の開業の記事が掲載されていた。しかし、このクレミュー・ブーシェ会社は、1865年3月7日の登記簿^⑥から「エス・ブーシェ会社」へと会社名が変更されていたことが確認されている。その登記簿上の出頭者は、リュシアン・ギョイヨ氏で、私文書は去る2月28日にパリにて、三者のあいだで登記されたものであり、その三者とは、パリのイタリアン通り29番地に居住するクレミュー氏、パリのシュワズール通り4番地のブーシェ氏、リュシアン・ギョイヨ氏の出資者三名であった。

1865年3月8日の裁判記録^⑦には、エス・ブーシェ会社の中にエム・ブーシェ (M. Boushè) が記載され、息子と考えられる。会社名がエス・ブーシェ会社となった洋裁店「エス・ブーシェ」は1865年3月7日に開店した。

1867年パリ万国博覧会が開催された。『パレ・ロワイヤルの歴史』^⑧によるとパリ万国博覧会の RESTAURANT DE LA ROTONDE からギャルリー・ド・パリへ万国博覧会への出展許可が送られた。エス・ブーシェは、銅賞を受賞する^⑨。この時期に幕末パリに派遣された幕府使節団の徳川 (清水) 昭武一行は洋服を購入している。1867年5月26日 (慶応3年4月23日) には、「ブーセ」会社へ民部大輔用達申渡書が提出される^⑩。商用名刺には、創作した葵紋に刀や剣、日章旗のマーク、「FOURNISSEURS BREVETÉS DE SAI LE PRINCE MIMBOU TAYO-DONO」が記された^⑪。

1878年3月12日の「タン」^⑫誌の広告には、ギャルリー・ド・パリからエス・ブーシェに店名変更が記されている。この変更によって、洋裁店「エス・ブーシェ」は会社名と店名が同一のものとなった。このことは、1878年4月7日の裁判記録^⑬からも確認できる。裁判記録の内容によれば、この会社の発効は1878年2月1日にさかのぼる。そして会社は1884年6月30日まで継続することになるだろうと記載している。会社の商号および署名は次のものとなる。

S. ブーシェ・アンド・カンパニー
(原語は S. BOUCHÉ et C^{ie})

当該証書の写しは、1878年3月25日にセーヌ県の商業裁判所の記録保管所に提出され、同日にパリの公安裁判所の保管所に提出される。

1882年3月28日の裁判記録^⑭では、エス・ブーシェの解散が記されている。その理由として、エム・ブーシェが亡くなると解散することになっていたようだ。1882年5月1日の登記簿^⑮には、エス・ブーシェ解散 (解散手続き) が記されている。会社の解散に関する権限を有する者として、パリのサン・ラザール22番地に居住するサルー氏が裁判所に出頭し、去る4月22日にパリで作成された証書を提出することを申し出ている。証書には

「エス・ブーシェ」ではなく「スタニスラス・テオドール・ポリカルプ・ブーシェ」という正式名で記載されていた。登記簿は、他の人たちとで所有されていた会社の解散に係るものであった。エス・ブーシェは、倒産ではなく解散という形をとって店を閉じることとなった。

男子服の普及・発達は、発祥経路の一つに洋裁店「エス・ブーシェ」の存在が多であったことを指摘することができた。幕末期から明治初期において洋裁店「エス・ブーシェ」と日本人の交流は、男子服史の一助として位置づけられる。

(代表：徳山孝子)

(3) 徳川慶喜に贈呈された軍装品

写真の現存する徳川慶喜が着用した軍服については当時の將軍の礼服、通常服であり、パリの軍事博物館に展示される軍服とほぼ同じ意匠である。また現存する軍帽^⑯の意匠から、將軍が通常時に着用する”Kepi”であることが確認できた。

靖国神社遊就館に現存する三つ葉葵が刻印された兜と胸甲については、ナポレオン3世が創立した近衛兵^⑰の甲冑と同じ仕様と考えられる。また軍事博物館で入手できた当時の“Journal Militaire” (1854年)は軍装品の詳細を具体的に記述した貴重な資料である。

幕末にフランスから導入されたアラビア馬用の馬具と練習用の馬具も同意匠のものが軍事博物館で確認できた。鞍下に刺繍された三つ葉葵紋からも幕府に対するフランスの好意が伺える。

(分担：中村茂)

(4) 明治前期の男子服技法書にみる *The Tailor's guide* の位置づけ

The Tailor's guide^⑱に掲載されている技法と関連のある G. Compaing の著書、さらにその技法を発展させた C. Compaing や L. Devere の著書を探り、計測図の特徴、計測項目の推移、経度尺の成り立ちとその作成法を明確にすることで、明治前期の男子服技法書にて紹介された技法の成立過程と位置づけが明らかになった。*The Tailor's guide* の計測項目は、主要項目が選定される過渡期のものであり、個別対応からサイズ対応への汎用性のある衣服設計が整備される足掛かりとなるものであった。また、経度尺の構想は *The Tailor's guide* においてサイズ毎のシステムとして整えられたと捉えられる。

明治前期の男子服技法書では、*The Tailor's guide* の翻訳本^⑲に記載された定規や製図の一部の内容が、断片的に何冊かの著書^⑳に用いられ出版されていた。

日本へ紹介されたその技法は、すでに成熟に達しつつあったものだったが、技法の基礎や変遷を知らずして、完成した形式をそのまま受け入れた為、その技法を導入し活用する

までの知識と技術が伴わなかった。その為、断片的な技術の紹介に留まったといえる。また、それらの技法書が、一般男女子あるいは女子裁縫の教本として位置づけられていたことも関係している。しかし、明治前期の技法書には、計測図として裸体図に計測箇所を示すなどの独自性がみられ、テーラー技法を日本の慣習や現状に合わせた形で浸透させようとする意図が伺える。

The Tailor's guide は明治前期において、体型を反映した製図製作のために必要な最新の技法として捉えられていたことは想像に難くない。たとえ 23 年前の海外の技法であっても、計測図と計測項目、インチテープ、小から大までの経度尺、曲尺など、日本にはなかった定規や計測法と単位が最新の技術として紹介され、注目されたのであろう。この当時、日本で出版された男子服技法書において、*The Tailor's guide* の技法受容がみられ、その源流がパリのテーラーにあったということ、またその技法がサイズ展開法に関わるシステムの過渡期であったものだという事は興味深い事実であり、パリにおけるテーラー技法に触れた一つの痕跡であったといえる。

(分担：笹崎綾野、協力：藤田恵子)

<引用文献>

- ① 明治神宮、図録「五箇條の御誓文発布百三十年記念展明治天皇の御肖像」、平成 10 年 4 月 24 日、15
- ② 徳山孝子、明治天皇の軍服フランス製？パリの服飾学校にデザイン画、読売新聞、2017 年 12 月 17 日（朝刊）
- ③ *Journal des débats*、Bibliothèque nationale de France、1862 年 11 月 13 日（木）
- ④ *Le Temps*、Bibliothèque nationale de France、1862 年 11 月 18 日
- ⑤ *Journal des débats*、Bibliothèque nationale de France、1862 年 11 月 18 日
- ⑥ ARCHIVES de PARIS、D. 32. U3 (46)、No. 340、1865 年 3 月 7 日
Crémieux Bouché & Cie から S. Bouché & Cie へ（会社名変更手続き登記簿記載）
- ⑦ *Gazette des tribunaux*（裁判記録）、Bibliothèque nationale de France、マイクロフィルム、1865 年 3 月 8 日
- ⑧ OFFRTE PAR LL、*HISTOIRE DE PALAIS-ROYAL*、RESTAURANT DE LA ROTONDE、Bibliothèque nationale de France、1866
- ⑨ LE JURY INTERNATIONAL、*EXPOSITION UNIVERSELLE DE 1867 A PARIS*、CATALOGUE OFFICIEL DES EXPOSANTS RÉCOMPENSÉS、Bibliothèque nationale de France、1867、26
- ⑩ 徳川昭武滞欧記録第一、日本史籍協、1932、179
- ⑪ 田中芳雄、外国摺拾帖二（A00-6141）、

- 東京大学総合図書館蔵、1869-1876
- ⑫ *Le Temps*、Bibliothèque nationale de France、1878 年 3 月 12 日
 - ⑬ *Gazette des tribunaux*（裁判記録）、Bibliothèque nationale de France、マイクロフィルム、1878 年 4 月 7 日
 - ⑭ *Gazette des tribunaux*（裁判記録）、Bibliothèque nationale de France、マイクロフィルム、1882 年 3 月 28 日
 - ⑮ ARCHIVES de PARIS、D. 32. U3 (0202)、No. 486、1882 年 5 月 1 日、S. Bouché 解散（解散手続き登記簿記載）
 - ⑯ 久能山東照宮博物館
 - ⑰ L'escadron des Cent-Gardes
 - ⑱ C. Compaing、Louis Devere、*The Tailor's guide*、1855-56、London
 - ⑲ 原田新次郎訳、西洋裁縫教授書、川勝利八、兎屋版、1887
 - ⑳ 正木安（子）、男女服装西洋裁縫指南、1883
 - ㉑ 石井郁太郎、衣服裁縫の教、1883
 - ㉒ 鈴木正夫編輯、和洋男女裁縫獨案内、1887
 - ㉓ 嵯峨野彦太郎、日本西洋裁縫教の種本、1887

5. 主な発表論文等

- 〔雑誌論文〕（計 1 件）
- ① 徳山孝子、幕末における日仏交流から見た男子服の導入—洋裁店エス・ブーシェ（S. Bouché）を中心に—、日本家政学会誌 68(10)、査読有、509-519、2017
- 〔学会発表〕（計 7 件）
- ① 徳山孝子、明治維新时期における AICP 校に現存する男子服意匠、一般社団法人日本家政学会第 68 回大会、口頭（一般）、2016
 - ② 中村茂、明治維新时期におけるフランスからの男子服意匠の導入の歴史—徳川慶喜に贈呈された軍装品—、日本仏学史学会第 40 回大会、口頭（一般）、2016
 - ③ 笹崎綾野、明治維新时期におけるフランスからの男子服意匠導入の歴史—フランスと日本の紳士服技法書について—、日本仏学史学会第 40 回全国大会、口頭（一般）、2016
 - ④ 笹崎綾野・藤田恵子、1850 年代～1900 年代にみる日本・フランス・イギリス・アメリカの男子服製図法の比較、国際服飾学会第 27 回国際学術会議、ポスター、2016、SEOUL BAEKJE MUSEUM（韓国）
 - ⑤ 徳山孝子、幕末から明治期における金銀モール刺繍、一般社団法人日本家政学会第 67 回大会、口頭（一般）、2015
 - ⑥ 中村茂、明治維新时期におけるフランスからの男子服意匠の導入の歴史、日本仏学史学会第 461 回月例会、口頭（一般）、2015

- ⑦ 徳山孝子、明治天皇における御正服（軍服）意匠の導入、一般社団法人日本家政学会第66回大会、口頭（一般）、2014

〔その他〕

- ① 神戸市立博物館（公開講座）
徳山孝子、「べっぴん（別品）さんと神戸のファッション」－神戸開港150年を記念して日本の洋装化（明治天皇の御正服）を中心に－、2017年9月16日、神戸市立博物館
- ② 神戸松蔭土曜講座（第27回）
徳山孝子、～神戸開港150年～「明治天皇の御正服と神戸の洋装化」、2017年9月16日、神戸松蔭女子学院大学
- ③ 成果報告会（一般公開）
幕末から明治維新期の日仏両国関係からみた男子服意匠の経緯と実態、2017年12月16日、神戸松蔭女子学院大学
- ・ 徳山孝子、幕末から明治維新期における日仏交流から見た男子服の導入－洋裁店エス・ブーシェ（S. Bouché）と明治天皇の御正服を中心に－、
 - ・ 中村茂、最後の将軍、慶喜に贈呈されたフランスの軍装品について、
 - ・ 笹崎綾野、明治前期の男子服技法書にみるフランスのテーラー技法とその位置づけ－“*The Tailor's guide*”を中心として－
- ④ 新聞掲載
徳山孝子、明治天皇の軍服フランス製？パリの服飾学校にデザイン画、読売新聞、2017年12月17日（朝刊）
- ⑤ 一般向けセミナー
中村茂、19世紀フランス軍の華麗な軍服、Think of Fashion 049、2018年2月24日、スパイラルルーム（青山）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

徳山 孝子 (TOKUYAMA, Takako)
神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・教授
研究者番号：10271470

(2) 研究分担者

中村 茂 (NAKAMURA, Shigeru)
神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・教授
研究者番号：80128834

木谷 吉克 (KITANI, Yoshikatsu)
神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・教授
研究者番号：40186250

打田 素之 (UCHIDA, Motoyuki)
神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・教授
研究者番号：20368492

笹崎 綾野 (SASAZAKI, Ayano)
神戸芸術工科大学・芸術工学部・准教授

研究者番号：60724010

(3) 研究協力者

森田 登代子 (MORITA, Toyoko)
藤田 恵子 (FUZITA, Keiko)
山村 明子 (YAMAMURA, Akiko)
刑部 芳則 (OSAKABE, Yoshinori)